

子どもたちの笑顔。
子どもたちとの信頼関係。
そこから多くのコトが学べる。



香川大学児童文化研究会

体 育館いっばいに広がった巨大なダンボールの迷路。その向こうには、大きなダンボールのすべり台に歓声をあげる子どもたちの姿。イキイキと走り回る子どもたちと一緒に笑顔で走る大学生——。

これは11月3日、学祭で盛り上がる香川大学でのワンシーン。大学の体育館がこの日は子どもたちであふれかえっています。「子どもまつり」と名づけられたこのお祭りを実行・運営しているのが、香川大学の公認サークルである「児童文化研究会」です。「すごい熱気でしょう」。笑顔で教えてくれるのは、会長の高橋亮さん（経済学部3年）と副会長の松田直也さん（工学部・2年）。例年、地域の子もたちが800人も集まってくるという「子どもまつり」は、同研究会の一大イベントだとか。「もうね～、休め暇もないんですよ。弁当も交代で食べるくらいで（笑）」といいながらも、笑顔からは子どもたちへの愛情が伝わってきます。

香川大学の公認サークルの中でも長い歴史を持つ同研究会。現在は44名の学生が在籍しています。主な活動内容は、地域の子どもの会のイベント運営や月1回の自主イベント、また夏に自分たちで企画・運営するキャンプ、そして年1回のこの「子どもまつり」。メンバーはそれぞれ、ゲーム、クラフト、人形劇の担当に分かれ、それぞれが子どもたちと一緒に遊べるイベントを考え、実行。子どもたちに親しんでもらうため、サークルネームもあるそう。ちなみに高橋さんは「犬P」、松田さんは「モスラ」。

高橋さんは、「街で会ったときに覚えてくれるんですよ。手を振ってくれたり「また遊ぼうね」といってくれたり。そりゃもう、うれしいですよ」と言います。その横で「キャンプなんかで一緒に活動すると、次の年も覚えてくれるんですよ」と、松田さん。ふたりとも、もともと子ども好きだったから、というのが同研究会に入ったきっかけ。「でも、子どもたちから学ぶことのほうが実は多いんですよ」。どんな時でも子どもたちの元気な姿を見ているだけで湧いてくる「頑張ろう」という気持ち。そして信頼されることの責任の大きさとそれ以上のやりがい。そういったものがこの研究会では得られると、ふたりは顔を見合わせます。「先輩たちが築き上げた信頼をずっと続けていきたいですね」という同研究会は、高松市教育委員会が指定する「地域活動促進事業の指導員」としても登録されています。「社会にでも子どもたちと関われる仕事に…と考えるようになった」というふたり。世代を超えた交流で育まれていくのは、形ではない「優しさ」や「思いやり」。子どもたちにもきっと伝わることでしょう。そして、「心の交流」で得るもののかけがえのない大切さを受け継いで、「児童文化研究会」の活動は続いていきます。

香川大学フットサル部 KAGAWA UNIVERSITY FUTSAL CLUB



激しさを楽しむ。それがフットサル。

フットサルとは、5名体制で20m×40mのピッチ内を駆け回る激しいスポーツ。大会は主に20分ハーフになっていて、その間、全員が攻め、全員が守ることになります。サッカーボールよりも弾まないボールであるため、細かな動きを必要とされます。交代は自由ですが、それはそのハードさによるもの。

熱心にフットサルのルールを教えてくれるのは、現在「香川大学フットサル部」の主将を務める井関哲朗さん（教育学部3年）。9月の香川県大会を終え、12月の四国大会に備えて練習を続けている中で取材です。現在、部員は50余名。「最近のフットサルチームのおかげか、うち20名ほどが女性なんです」。部員の半数は初心者であるため、後輩指導も2・3年生の役割となります。練習は週2回、木曜日と日曜日。人数が多いため、「練習量がなかなか足りないんですよ」というのがもつきの悩みであるとか。それでも、毎年7月に行われる大学の四国インカレでは3連覇という猛者チームなのです。

「僕自身、大学に入るまではサッカー一筋でしたから、フットサルの存在を知ったのは大学に入ってから。最初は、チームメンバーの仲の良さに惹か

れて（笑）入部したんですよ」。というだけあって、激しいゲーム中以外は「フランクな雰囲気」を作りたいと笑顔を見せます。「厳しいことは大事ですが、チームプレーはみんなで作ります。上げるもの。誰かが先頭に立ってひっぱっていくのもひとつのやり方でしょうが、みんなで話し合って、どうするかを考えていきたいんですよ」という井関さん。主将となった頃には、どういう風にしたらチームがまとまるか、ということに常に考えていたそうです。「チームが勝っているときはいいんです。負けたときやチームがうまくいってない時、どうみんなの意識をひとつにしていけるかが、課題でした。でもそういった経験が教育実習などでも役に立っただけですよ」、とうれしそうに笑う井関さんをチームのメンバーが慕う理由、納得です。

人数が多ければ多いほど、まとめるのは大変なこと。ですが、「みんなをひとつひとつやり方を決めたり、勝つための方法を考えたりする。これがチームワークの土台になっていくんだ」と実感しています。「そのチームワークで9月の県大会でも社会人チームを下し、12月の四国大会を目指し、練習が